

令和5年度 自己評価及び学校関係者評価書

資料3

令和6年(2024年)3月22日
市立札幌開成中等教育学校

1 本年度の重点目標

課題探究的な学習に向き合う環境 / 様々な文化・価値観との出会い、交流できる環境 / 安心して挑戦できる環境

2 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
重点目標	国際バカロレア(IB)が示す10の学習者像を意識した日常的な取組に努め、MYP(Middle Years Programme)およびDP(Diploma Programme)認定校の実現を目指し取り組むことができたか。	A	MYP・DP認定校として、国際バカロレア機構(IBO)と連携し教育活動を推進している。昨年度までの評価訪問で示された、認定校としての評価と課題について、年間を通して各教科のユニットプランと学際的単元のさらなる改善を校内研修と位置づけて行った。それによって、教員同士で協働設計の理解と学びが深まり、IB教育の理念や本校の目指す学校作りに対する共通理解を図ることができた。	A	A
	SSHの取組を通して、教育課程の充実を図ることができたか。	A	今年度は特に海外研修や国際交流の取組として、「台湾プロジェクト」「さくらサイエンスプログラム」を4年ぶりに実施できた。「台湾プロジェクト」では卒業生による現地ガイドの活躍、「さくらサイエンスプログラム」ではアフリカ(ザンビア)の高校生の招へい等、特徴的な取組となった。また、研究発表や物理オリンピックにおいて国際大会にも出場する生徒もおり、トップ層の育成にもつながった。	A	A
	重点目標の内容は、学校や生徒の実態を踏まえた適切な設定となっているか。	A	本校では、課題探究的な学習に向き合う環境を整えることを重点目標とし、SELFの理念とIBおよびSSHのフレームを活用している。IBでは多様な文化の理解と尊重の精神を、SSHでは科学的素養の育成と持続可能な世界・地域を創造するカリキュラムを開発している。そのために、地域、高大、産学の連携を強化し多数の支援者を得ている。生徒の研修への意識は高く、今後もこの状況を維持していく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価・改善策ともに適切です。「各教科のユニットプランと学際的単元のさらなる改善」について、更に授業が改善されて、生徒の学びが深まることを期待しています。				
教育課程・学習指導	【課題探究】「なぜ、どうして」を大切にしたい、生徒自身が学びの主人公となる「課題探究的な学習」を充実することができたか。	A	コロナ禍による制限・制約は大分解消され、各教科の工夫による課題探究をベースとした指導が一層進められた。IBCの学校開発プラン研修によりユニットプランナーの見直しと提出が行われ、各教科における学習方法や課題設定、概念のかかわりについて理解が深まった。また、次年度より新しい形での学際的単元の授業が始まることにより、教科を越えたユニットプランの作成を通して教科間の交流が深まった。次年度の実施により、改善を加えながらよりよい授業作りを目指していく。	A	A
	【専門性】理数英の専門学科の特色を生かした教育課程を編成することができたか。	A	SSHの学びの集大成であるコスモサイエンスの取組について、実験・実証の方法など、必要な知識やスキルを身に付けることのできる教育課程の編成に努めた。また、研究成果報告会ではオンラインによる発表を併用しつつ、英語でのプレゼンテーションも行うなど多彩な手法とアイデアにより多くの生徒が参加できる実施方法を整えることができた。教科としても、ネイティブ教員による英語による授業実施のコースを設けるなど、コスモサイエンスの取組と結びつく段階的な指導を実現することができた。次年度に向け、数学科において発達段階や学習理解の度合いに合わせたカリキュラムの進度について見直しが行われ、より学びやすく、理解が進むよう単元構成を再構築した。	A	A
	【バランス】知徳体のバランスがとれた教育課程となっているか。	A	引き続き、道徳・総合的な学習(探究)の時間、特別活動の横断的カリキュラムである「こころからだの時間」を効果的に設定するとともに、自らの健康維持や体力向上に生徒が主体的に取り組む工夫に努めた。道徳は道徳教育推進教諭による全体計画を元に各学年の担当者を中心に運営が進められ、指導の方法や状況に応じた指導内容の工夫など、きめ細かな対応ができた。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価・改善策ともに適切です。「新しい形での学際的単元の授業」が成果のある学びとなることを期待しております。				
生徒指導・教育相談	【育てたい生徒像】生徒がTPOに応じたふさわしい対応ができるように支援することができたか。	A	個々の生徒への気づきや対応について、教員間で共有できる環境が整備されたことで、個々の生徒に関する情報共有が容易になった。引き続き、よりきめ細やかな対応を目指すべく、それらの活用方法について工夫を図っていく。保護者・教員・生徒の意見を踏まえ、よりTPOに焦点化した「生活のルール」に改訂された。今後、SELFの理念に基づいた、生徒の発達段階に応じた適切な支援の在り方や、「TPOに応じた…」についての共通理解をより一層深められるような研修の提供に努めていく。	A	A
	【異年齢交流】学校行事や生徒会活動を通して幅広い異年齢の交流を図り、生徒の自主性や協調性を育むことができたか。	A	コロナ禍による制約がほぼ解消され、改めて異年齢交流や生徒の学びをより充実させることを目指した生徒会行事を検討、実施することができた。学校行事や生徒会活動のねらいをより明確にしたことで生徒が主体的に活動する環境を整備できた。今年度の取組を踏まえながら、生徒会行事の更なる改善を図っていくとともに主体的な態度の育成を目指して、より自治的な活動を促進していきたい。	A	A
	【教育相談】教育相談の充実を図ることができたか。	A	放課後に設定されている教育相談/学習相談を優先的に行うことができる時間、年間設定している教育相談月間は、即時的な対応と定期的な生徒理解を図る両面において、教員・生徒双方ともに効果的であったと考える。生徒理解の一助として今後も継続する。アンケートやアセス(学校環境適応尺度)の実施は、個々の生徒の困り感や特性を知る一つの手段として活用できた。今後、特にアセスについて、各学年や学校全体としての分析を図ることで、更なる活用の深化を進めていきたい。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価・改善策ともに適切です。三者による協議がなされたことで、よりよい学校づくりにつながることを期待しています。				

(キャリア探究教育)	【主体的な取組】生徒が自らの生き方を主体的に考え将来を切り拓く力を養うことができるよう、進路探究の充実を図ることができたか。	A	生徒が主体的に考え、自分のため、社会のために動くことができる機会を提供するため、「Future Job Session(未来志向型進路探究学習)」や「コスモサイエンスプロセス(課題探究活動)」などのプログラム開発をした。次年度以降も継続して行っていく。	A	A
	【自己理解】体験活動を通して自分を知り、自立を目指すことができるような取組ができたか。	A	CSR活動(企業の社会貢献活動)に特化した職場体験活動をさらに発展させ、社会の中で自分らしく生きていくために必要な職業観・勤労観を身に付けることができるプログラムを更に研究し実践していく。	A	A
	【社会とのつながり】変化の激しい変わりゆく社会で自らどのような役割が果たせるかを生徒自身が意識できるような取組ができたか。	A	「SA(奉仕活動)・CAS(創造・行動・奉仕)」を発達段階に応じて校内から校外へ発展させる中で、校内のニーズ、社会のニーズを探究する経験を積ませ、社会の中で自分が果たしていく役割を考えるプロセスを作っていく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価・改善策ともに適切です。今後の計画(改善策)だけではなく、従前の取り組みについて振り返りながら取り組まれることを願っております。				
保健・安全管理	【見守り体制】生徒の安全・安心・快適さを維持する環境を整えることができたか。	A	生徒の見守りは、生徒理解と支援に関する研修を定期的に行う、SCなど専門的な立場からの助言を参考にしながら、支援の方法を確立する体制を構築した。IBプログラムが推進する日常的な貢献活動を通して、生徒は相互に安全・安心な環境を作り上げる意識を高めている。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価・改善策ともに適切です。				
組織運営	全教職員が連携し、分掌業務を円滑に推進できたか。	B	分掌業務と各期業務(基礎期(1・2年)・充実期(3・4年)・発展期(5・6年))の分立体制で4年が経過し、組織体制の在り方は定着しつつある。今年度は、昨年度の振り返りから、業務の相互連携を強化するため機能を高めるべく会議の種類を細分化したが、業務推進の部分で改善の余地がある。より良い方向性を目指し業務フローの改善と分掌と期との連携の見直しを図っていく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価・改善策ともに適切です。昨年度に引き続き自己評価が「B」となっていますが、改善へ向けて継続的に取り組んでいただき成果が出ることを願っております。				
研修	生徒・保護者・教職員が課題探究的な学習を行うための環境整備を推進することができたか。	A	昨年度の評価訪問の反省を受け、今年度の学校開発プランはユニットプランナー/IDUプランナーの作成とし、全教員で1年かけて取り組んだ。協働設計を重視したユニットプランナーの作成の過程で、教員はIBの理念や課題探究的な学習の理解を深めることができた。次年度は教員だけでなく、学校職員や保護者がIBを理解し、交流や学習できる研修機会を増やしていく。	A	A
	研修等で得たIBプログラムやSSH等の情報を保護者・教職員間で共有することができたか。	A	各教員が参加した研修について、校内研修や通信等で共有することができた。IBプログラムやSSH等の取り組みは学校公開、HP、研究報告会等で共有することができた。引き続き、IBやSSHの取り組みを理解して頂けるよう積極的な情報をHPや学校通信等で発信していく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価・改善策共に適切です。				
保護者・地域情報提供との	入学を考えている児童に対し、必要な情報を適宜発信することができたか。	A	今年度の学校説明会は、9月の1回の開催で募集要項を配布し、入学を考えている小学生に対して在校生が模擬授業や校舎案内を担当し、本校生徒のすがたを感じてもらった機会とした。また、保護者には教頭の進行による本校教職員によるパネルディスカッションを実施し、より深いIBの理解を促すことができた。	A	A
	学校だよりやホームページ、懇談会などを通して、学校の様子がよく分かるように伝えているか。	A	今年度は、ホームページ「開成トピックス」の充実を重点とし、日々の様子を公開した。保護者からは高い評価をいただいたものの、より多くの発信を求める声もある。学校公開日は8回の実施となり、PT会公開講座(進路・IBカフェ・講演会)は盛況であった。保護者のIBに対する意識が高いため、今後もPT会役員と協働し、より良い研修の設定に努めていく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価・改善策共に適切です。				
教育環境整備	タブレット端末や他のICT機器は、課題探究的な学習を行う上で効果的に活用されているか。	A	タブレット端末(4年生～6年生)及びGIGAスクール端末(1・2・3年生)を安定して活用できる環境やオンライン上で閲覧できるリソース(図鑑や新聞記事)を整備した。セキュリティや利用に関するガイドラインを周知し、生徒は端末を自己管理できるスキルを身に付けている。今後は、新たな課題が出たときに早期対応し、環境整備ならびに運用に反映していく必要がある。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価・改善策ともに適切です。				